



ファッションについて書いたり話したりすることを仕事としていますが、私自身は洋服やメイクを楽しむ時間もとれないのが実情です。とはいえ、年齢なりの衰えを感じることはあっても、20〜30代のころより肌は落ち着いてきて、メイクも年々、薄くなっています。BBクリームとリップだけで出かけてしまう日があるほど。

ここ数年は、ふだんのスキンケアはあつさり、春先や秋口など季節の変わり目だけ「オーキテアンベリアル」をトータルで投入するのが、お決まりのサイクルになっています。通年継続して使うよりも、肌の疲れを一気に解消するカンフル剤としての使い方が、私には合っているようです。

とりわけ「ザ コンセントレート セロム」は素晴らしい。秋口に惜しみなく使うと、翌年の夏の肌の調子もいのように感じます。多少、高価ではあっても、「いいもの」を妥協せず、長く使い続けるのは、自分に対する投資のひとつ。

そうそう。今日の撮影では、ヘア&メイクさんに「小顔に見えるための眉毛の描き方」を教えていただきました。女性は美しく装うことで気持ちが高揚するものですし、こうした「学び」の作業は楽しいものです。

ただ、人の「美しさ」は鏡の中にある

のではありません。

自分らしくありのまま。だれの真似もいらない。

「美は見る者の目に宿る」という言葉があります。美は、それを「美しい」と感じる他者が存在して初めて、美として存在しえるものです。

たとえば、表彰台に立つアスリートは美しいものですが、彼らの美しさに顔の造作はほとんど関係ありません。与えられたギフトを存分に発揮し、自分らしさを最大限に放出した姿に、人は「美しい」と心打たれるのです。アナ雪の「Let It Go」的な境地とでもいうのでしょうか。ただし、それは決して、「天然」というか「生まれたまんま」という意味ではありません。何も考えず「ありのまま」では単なるわがままな人だし、周囲も迷惑ですよ。

「ありのままがいいんだ」という自由な境地に至るまで、さまざま葛藤と向き合い、悩んだ過程に価値があるのです。そしてファッションとは、自分自身と向き合い、かけがえのない自分らしさを見つけていく「心の旅」そのもの。こうした葛藤の先に存在する「美しさ」は、成熟した大人の女性にとって、人生のひとつの指標となってくれるのではないのでしょうか。

真摯に自分自身と向き合い、 かけがえのない 自分らしさを探す「心の旅」。 美しさは葛藤の先にあるのです

——中野香織 エッセイスト 服飾史家

Kaori Nakano

なかの・かおり / 「ファッションとは人と時代を形づくるもの」という定義のもと、過去2000年の男女ファッション史から最新モードまで、研究・執筆・講義を行っている。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。

ワンピース¥58,000(チェルキ(TOMOUMI ONO))
ネックレス¥42,000・ブレスレット¥22,000
(アタリー(ギンタ)) リング¥1,882,000(ケイテン)
●Precious2016年3月号に掲載したものです。
現在、手に入らないものもあります。